D 24　子供の住環境としての高層住宅居住　その1　研究の到達点と視点

目白学園女子短大　○中島明子　東京学芸大　小澤紀美子　佐藤純子

目的　超高層住宅時代を迎えた今日、高層住宅居住は一つの住様式として定着しようとしている。高層住宅居住に関しては様々な問題が指摘され、高層住宅肯定論者であっても子供の住環境の問題は否定出来ないものとみられてきた。そこで、これまで多くの研究蓄積のある建築学を中心に関連諸分野も含め、子供の住環境に関する高層住宅居住の研究を整理し、到達点を明らかにし、この結果から研究の視点を定める。

方法　建築学会（論文報告、大会講演梗概その他）を中心に、家政学会その他の研究論文及び住宅都市整備公団等の報告書、単行本等の文献の収集と分析を行った。

結果　建築計画論の流れからみると、中層住宅団地計画論における〈段階構成論〉（子供の発達段階に対応した遊び場等の計画）が高層住宅・団地計画において崩れ、領域論からみて〈セミ・プライベート〉〈セミ・パブリック〉空間（低層住宅における路地的空間）の欠如が指摘され、そこから派生する高層階の子供の遊びの減少、犯罪等の問題が取上げられている。これに対応して1970年代には住棟内部の住戸周辺に子供の遊び場が計画され、使われ方調査等が行われた。しかしこうした建築的解決は、使われていないだけではなく、犯罪や非行を誘発する結果となり、'80年代には否定されている。高層を前提にする限り、建築計画論上の解決はあっても現実には有効な手立てが無いのが現状で、最近では高層住宅肯定の立場からそれを裏づける研究が見られる。研究の視点は、子供の生活を規定する親子関係（その背景にある家族や社会の状況も含む）と住戸外・住戸内の生活を、高層住宅居住との関連で考察し、問題を克服する新しい居住方式を検討する所にある。